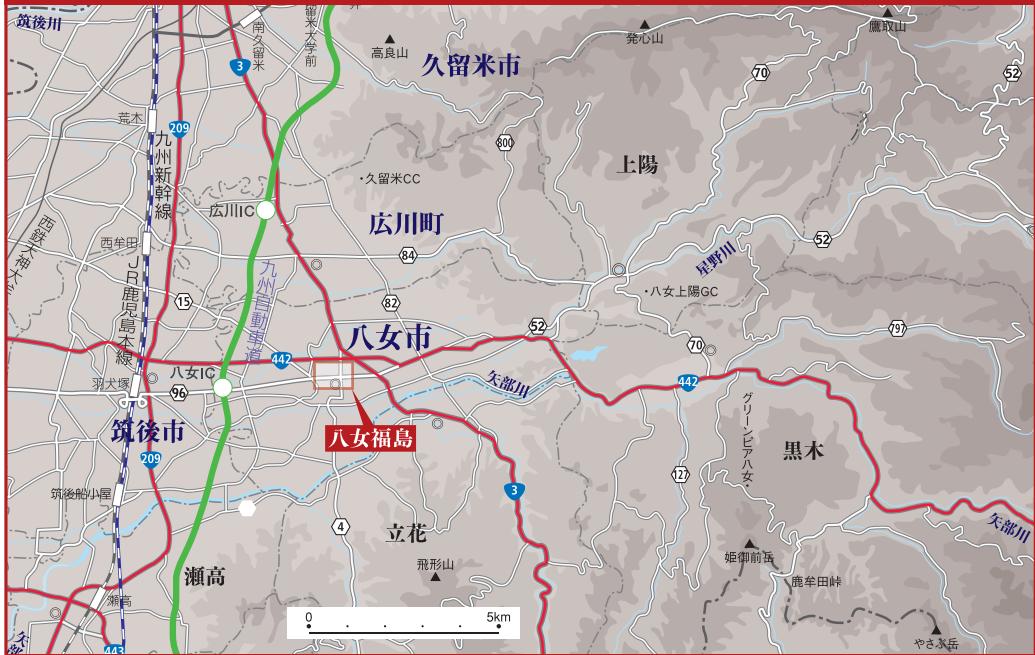


# 観る 知る 学ぶ 八女は楽しい



## 八女福島地区への交通アクセス

- JR九州(鹿児島本線)  
博多～羽犬塚下車・堀川バス 八女黒木線 約20分(約7km)  
福島バス停下車(総合案内・横町町家交流館へ徒歩約7分)
- 西鉄(福岡天神大牟田線)  
福岡天神～久留米駅下車・西鉄バス 八女福島線 約40分(約12km)  
福島バス停下車(総合案内・横町町家交流館へ徒歩約7分)
- 高速バス  
九州自動車道  
八女IC下車・タクシーで総合案内・  
横町町家交流館へ約10分(約4km)
- 車  
九州自動車道  
八女IC下車・総合案内・横町町家交流館へ  
約10分(約4km)

茶のくに  
八女・與・八女



八女市観光振興課 | TEL.0943-23-1192  
〒834-0031 福岡県八女市本町2-129

平成25年3月改訂



うた  
八女を謳う 八女にて詠む

# 八女福島の町並み界隈 文学碑巡り

清冽な矢部川の水と温暖な気候、紅色に染めた櫨の筑後路。古くからこの美しい風土を愛してきた八女福島ゆかりの文化人は多く、松尾芭蕉の高弟・志太野坡から続く八女の俳壇系譜を見ると、当時の華やかさが伝わってくる。また、俳人ばかりではなく日本を代表する洋画家・坂本繁二郎や青木繁も八女の関わりは深い。文芸評論家の山本健吉・女流俳人の石橋秀野夫妻は八女に眠り、伝記作家の小島直記や小説家・中薦英助は八女で育った。一方、芭蕉十哲の向井去来や野田成亮、放浪の俳人・種田山頭火も八女に立ち寄り句を残している。

八女を愛した彼らの言葉を拾いつつ、古い歴史の趣を残す八女福島の町並み<sup>(\*)</sup>をそぞろ歩くのは文学碑巡りの醍醐味と言えるだろう。

## 八女福島とは

八女の中心部(福島町)は古くからの町である。慶長6年(1601)に田中吉政が福島城として整備した後、久留米藩主有馬氏により廃城となったものの、商家町としての福島は残った。以後、八女福島はこの地方の交通の要衝となり、物資の集散地として発展していく。

## 文学碑めぐりのポイント

ここで紹介している文学碑は、八女福島にゆかりのある人々の足跡だ。そのため碑文はできるだけ自筆の文字が使われ、作者と関係のある場所に建立されている。すなわち文学碑のある地点は、作者の生きていた過去と現代を繋ぐポイントでもある。ぜひ実際に文学碑と向かいあって深呼吸し、八女の空気と文化の一端に触れてみよう。



※八女福島では、今でも宮野町、京町、古松町を中心に、江戸の風情を残す商家が数多く残る。

特に、江戸時代の往還道(久留米から豊後に抜ける「豊後別路」)沿いは、平成14年(2002)「八女福島伝統的建造物群保存地区」に選定されている。

## ～目次～

作者	場所	ページ
松尾芭蕉・長閑斎山布留・馬場埋木	平田稻荷神社	2
橘雪庵貫嵐	福島八幡宮近く	3
山本健吉・石橋秀野	旧木下家住宅(堺屋)	4
中薦英助	八女市横町町家交流館	5
古池花鶲	西勝寺	6
志太野坡・若林旦夕	古松祇園社	7
種田山頭火・小島直記	八女公園	8
坂本繁二郎・野見山朱鳥	無量寿院	9
石橋忍月・坂本繁二郎・酒井田柿右衛門	福島郊外	10
青木繁・向井去来	福島郊外	11
八女福島詳細マップ		12



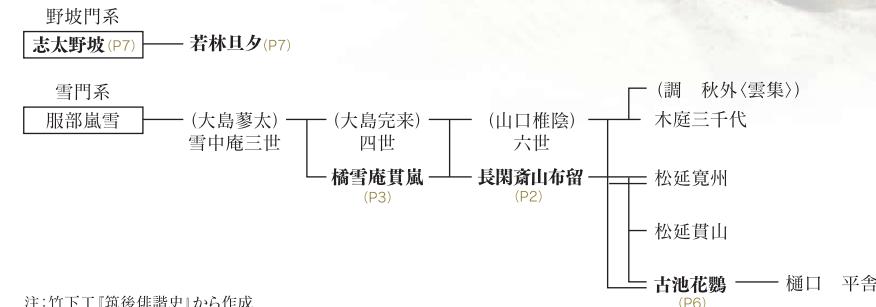
## 燈籠人形の世界を広げた八女の俳人たち

八女の燈籠人形を劇的に進化させた松延貫嵐。彼は若い頃に若林旦夕に俳句を学んでいる。その旦夕は松尾芭蕉の高弟志太野坡を師としていた。また貫嵐は後に同じく芭蕉の高弟であった服部嵐雪を祖とする雪中庵三世大島蓼太に学んだ。こうしたことから、貫嵐の息子山布留ほか八女の人々は雪門系俳人ということになる。

彼ら俳人は、貫嵐の後継者として俳句ばかりではなく燈籠人形の芸題を次々と生み出した。江戸後期の俳人たちの華やかな活動は、公演の演目を増やし作品に深みを与え、八女の伝承文化の確立に大いに貢献していくのである。



## 八女の俳壇略系譜



## 松延家俳人略系図



福島組大庄屋から淨瑠璃作者、ついには俳人になった風流人・松延貫嵐。彼は子孫にも大きな影響を与え、江崎傳まで一族に6名もの俳人を輩出している。

春もややけしきととのふ月と梅  
はる  
つき  
うめ  
祖翁



## 愛される芭蕉の俳句世界 八女にも 芭蕉句碑 (天保14年(1843)建立 平田稻荷神社境内)

### 俳聖・芭蕉を掲げた八女俳壇の門出

松尾芭蕉の百五十回忌(10月12日)を記念して建立。碑文の中の「橘雪庵門人」とは謹書した山布留の弟子たちのこと。庵名は山布留の父・橘雪庵貫嵐が初めて名乗ったもの。当日の「祖翁」追善句会には12,105の句が寄せられた。(書 橘雪庵二世長閑斎山布留)

### 一日三千句。八女俳諧文化の申し子。

## 山布留句碑

(平田稻荷神社 元治元年(1864)建立)

山布留の弟子達が山布留の没後10年目に資金を集めて建立した。碑文の中の「幹事 橘雪庵貫山」は山布留の二男で、兄の寛洲のあとを継ぎ橘雪庵四世を名乗っている。碑文は名高き久留米梅林寺第十三世羅山玄磨によるもの。山布留の往時の名聲がしのばれる。



路連れはおもへば花は桜かな  
はなさくら  
山布留

### 長閑斎 山布留

(ちようかんさい やまぶる)

安永元年~安政4年  
(1772~1857)  
福島町生まれ。橘雪庵(松延)貫嵐の二男。父に俳句の手ほどきを受け、江戸・雪中庵完来の弟子になり夷門・長閑斎と号す。橘雪庵二世と称す。26才の時、一日三千の句を作って江戸の俳人達を驚かせた。

野を焼いて土手にのぼれハ筑後川  
の  
や  
て  
て  
は  
ば  
ば  
が  
わ  
木

## 受け継がれる文化人・貫嵐の血脉 埋木句碑 (昭和24年(1949)建立 平田稻荷神社境内) 地図D-2

同神社境内にある一番新しい句碑だが筆跡は不明。埋木の七周年忌記念に建立。埋木の作品を発表した甥の江崎傳により建てられたのではないかといわれている。

### 馬場 埋木

(ばば うもれぎ)  
明治22年~昭和18年(1889~1943)

八女市細屋町生まれ。名は龍吉。

母は貫嵐の曾孫ハナヨ。貫山の孫。脚に障害があり、甥の江崎傳が編んだのか『みゆの眼』。俳句だけではなく歌や詩も作り、「ホトギス」等に発表しながら俳句の指導を行った。



### 平田稻荷神社

八女市本町43(西紺屋町)

境内への赤い鳥居が鮮やかな稻荷神社。山布留は稻荷の熱心な信者で、屋敷内に平田正一位稻荷大明神の祠堂を勧請した。



## 八女福島の地にもたらした上方文化の風 貫嵐句碑 (平成17年(2005)建立 福洲銀行跡小公園)

### 短冊に唯一残った自筆の句

貫嵐は燈籠人形の囃子を聞きながら息をひきとったといわれる。そのため貫嵐の功績を顕彰するための句碑は、祭りを見守り囃子が聞こえる場所が選ばれて建立された。高さ1.8mの御影石には唯一残された自筆の短冊をもとに、その句が刻まれている。

### 橘雪庵 贯嵐

(きっせつあん かんらん)

享保18年~寛政7年(1733~1795)

俳人・物語作者・大庄屋  
本名 松延甚左衛門種茂、福松藤助(陶芋)、句集「俳諧人次第」  
福島組大庄屋の家に生まれ、宝曆3年(1753)に大庄屋職を相続。幼年期に俳人若林宗元から俳諧を学ぶ。  
宝曆4年(1754)宝曆一揆により家を破壊される。三年後、大坂(大阪)に出奔。人形浄瑠璃作者になる。許されて帰郷し、燈籠人形を動くからくり人形に发展させた後、雪中庵夢太門下の俳人橘雪庵貫嵐として俳人になる。

壞れど積もれど春の深雪哉  
貫嵐

### 大庄屋から人形浄瑠璃作者、そして俳人へ。

江戸時代中期以来、八女では俳諧文化が花開き、多くの俳人が活躍した。  
その俳人の祖と言われているのが、橘雪庵貫嵐こと松延貫嵐である。

身分制度の厳しい封建時代にあって、大庄屋職から人形浄瑠璃作者になり、帰郷しては俳人になるという貫嵐の型破りな行動は、この地に華やかで進んだ上方文化をもたらした。

句界でも名を成した貫嵐は、雪中庵俳諧判者の免許を得て、福島八幡宮わきの隠居宅梅月庵で多くの俳人を育てた。彼が残した雪門の俳風は彼の没後も燈籠人形の発展伝承に大きな影響を与えている。

貫嵐は江戸期、八女福島町が生んだ代表的な文化人といえるだろう。



地図D-3

■福洲銀行跡小公園敷地内  
八女市本町110-1番地(中宮野町)

貫嵐とゆかりのある福島八幡宮のすぐ近くの道路脇。

仲睦まじく寄り添い、最後の句を詠む

## 山本健吉、石橋秀野 夫婦句碑

(平成11年(1999)建立 旧木下家住宅「堺屋」)



### 同じ石を分け合った夫婦句碑

碑文はともに二人の絶句で代表作。秀野の句は直筆、健吉の句も原稿等から一字づつ選び出された。夫婦句碑ということで桜御影石と同じ大きさで真っ二つに割り、その二つの石を噛み合わせた珍しい形。建立には全国から寄付金が寄せられ、歌手だまさしは健吉に送る歌「夢しだれ」を作曲している。堀屋裏門外の堀に沿って健吉の文字を拡大模刻した「夢中落花 山本健吉」の碑がある。この碑石は「夫婦句碑の標石」とともに旧石橋養元(健吉の祖父)宅の門柱だった。八女市西古松町にある無量寿院には山本健吉・石橋秀野夫妻が眠る石橋家の墓がある。



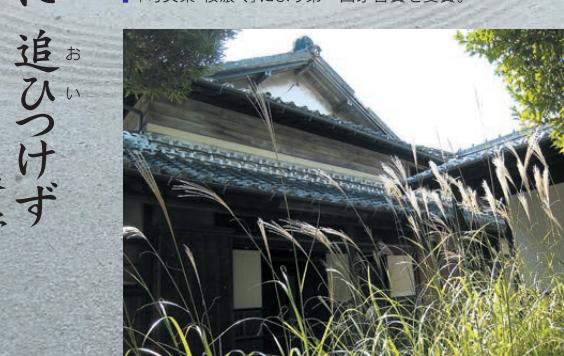
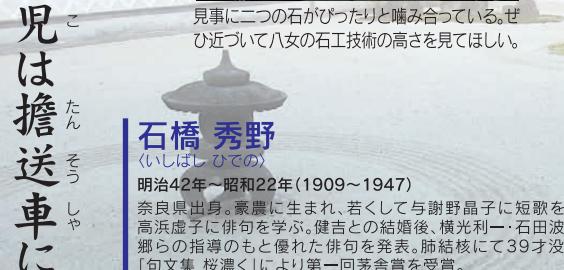
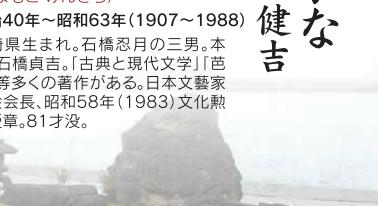
見事に二つの石がぴったりと噛み合っている。ぜひ近づいて八女の石工技術の高さを見てほしい。

### 山本 健吉

(やまと けんきち)

明治40年～昭和63年(1907～1988)  
長崎県生まれ。石橋忍月の三男。本名・石橋貞吉。「古典と現代文学」「芭蕉」等多くの著作がある。日本文藝家協会会長、昭和58年(1983)文化勲章受章。81才没。

### 健吉



秀野

こぶし咲く昨日の今日となりしかな

空白の時空を回顧し、未来へ繋げる

## 中園英助文学碑

(平成15年(2003)建立 横町町家交流館)

### 未完の絶筆「南蛮仏」で追い求めた郷里のルーツ

中園英助は戦前、旧制中学校(現・八女高校)までの少年時代を八女で過ごした後、故郷を振り切るように中国大陸に渡った。引き上げ後は八女に帰ることなく上京して純文学や推理小説を手がけ、語られることがなかった戦時下の中国を題材にした作品を次々と発表した。

日中の歴史の空白を埋めた彼は、晩年になり1992年から雑誌「新潮」にて連載された「南蛮仏」において、八女の実家に伝わる「瘦せ仏」の由来を辿っていくことで、自分自身の空白のルーツを探っていく。郷土の歴史を背景に郷郷を込めた感動的な自伝的歴史小説だ。



### 覗き込むと自分と空が見えてくる文学碑

地球をイメージしたかのような直径810mmの球形の黒御影石を、直径650mmの円状に切り取った平面部分に本人直筆の原稿から言葉が刻まれた。碑文は彼の数々の作品世界を貫く人生哲学であり、信念でもある。



地図D-2

### 八女市横町町家交流館

八女市本町94番地(東宮野町)  
0943-23-4311

公開 10:00～17:00 入場無料

北棟は弘化二年(1845)建築。当時の屋号は酢屋。高橋商店(しげます)が両棟を取得して明治・大正・昭和期と造り酒屋を営んだ。平成9年に町並み保存の拠点施設として整備復元された。2階のふるさと文庫には中園英助ほか八女にゆかりのある現代作家の資料コーナーがある。

歴史に空白あるべからず  
中園英助

### 中園 英助

(なかぞの えいすけ)

大正9年～平成14年(1920～2002)  
作家、本名 中園英樹  
福岡県遠賀郡上津役村に出生。昭和3年(1928)八女郡忠見村大字大籠に帰郷。37年旧満州を経て北京に遊学。敗戦により46年帰還。国際スパイ小説からルポルタージュ、評伝まで幅広い著作で知られる。主な著作は「夜よシンハリをうち鳴らせ」。

八女の俳界、輝く黄金期へ

## 花鸚句碑 (明治29年(1896)建立 西勝寺境内)

### 貫嵐・山布留が種をまき、花鸚が花開かせる

橋雪庵貫嵐とその子長閑斎山布留によって基礎作りされた八女の俳壇を、見事に開花させ黄金期を導いたのが古池花鸚だ。

江戸から八女に帰国した時、あの著名な雪中庵高弟だと全九州に名が知れ渡った。能書家でもあった花鸚は寺小屋も開き、習字の教えを受けた寺子数は約300人にも上ったという。雪中庵より九州補助になったときの披露宴には、なんと雪中庵六世推陰(すいいん)自ら江戸より下つてその席に臨んだ。生来の「小池」から改めた「古池」は、花鸚がこよなく敬慕した芭蕉の「古池や…」の句にちなんだもの。

近年、花鸚自筆の「蛤草帯孝子志々羅遊漁之図」の発見により、彼が明治5年・同16年の燈籠人形の台本も書いていたことが実証された。



#### 巨大な自然石は 弟子たちの敬慕のあらわれ

高さ2m幅1.5mの巨大な自然石は、弟子たちが発起して花鸚の八十才(傘寿)のお祝いに催した逆修追福(※生前に仏事をして供養すること)の集いの記念碑。碑文字は安武村(現久留米市)栄久住寺職俳人調秋外(雲集)によるもの。刻まれた句は花鸚辞世の句。

#### ■西勝寺 地図D-2

八女市本町80番地  
(西紺屋町)

真宗大谷派寿永山。文亀3年(1503)、蒲池氏の末孫頼理和尚が三潴郡蒲池村崇久寺から分寺開山。山門と楠の大木、本堂の一部に昔の面影を残している。



#### 古池 花鸚

文政元年～明治33年(1818～1900)  
俳人、幼名(小池)忠太郎、俳号 空阿(くうあ)、花鸚  
福岡県久留米市通町出生。父は久留米藩武士・小池源蔵。父の死を契機に「空阿」と名乗り西勝寺の僧に。長閑斎山布留の弟子になった後は「花鸚」と名乗る。諸国漫遊後、江戸の雪中庵山口椎陰に師事。帰國後は「晴雪庵」と号して俳句指導にあたる。墓は西勝寺。



夜の味は空にも知れて月と梅  
花鸚

芭蕉から野坡、旦夕そして燈籠人形へ

## 志太野坡、若林旦夕師弟句碑 (平成13年(2001)建立 祇園社)



#### 八女俳壇の種を蒔いた師弟の句碑

並び立つ師弟句。右が野坡の句で、享保元年(1716)の歳末、福島町の弟子の旦夕宅を訪れた野坡が、当時福島町の中心地だった東古松町のあたりで詠んだ句。この句に詠み込まれた魚市は、昭和初頭まで古松町界隈で開かれていた恒例の市で、近隣の庶民の買い物客で賑わった。左は旦夕の唯一残された句。

窓一つわがもの顔や  
鶏頭とう  
旦夕

#### 蕉門十哲の一人が 八女の地に蒔いた種は

芭蕉の死後、野坡は何度も九州を訪れた。後年「蕉門之学者」といわれるほど芭蕉の論説をよく理解し、社交的な温厚な人柄だったせいか、野坡流の門下は3000人ともいわれている。八女の弟子・若林旦夕からは松延貫嵐を経て山布留、花鸚ら多くの俳人が誕生し、彼らは「福島燈籠人形」の台本作者になった。

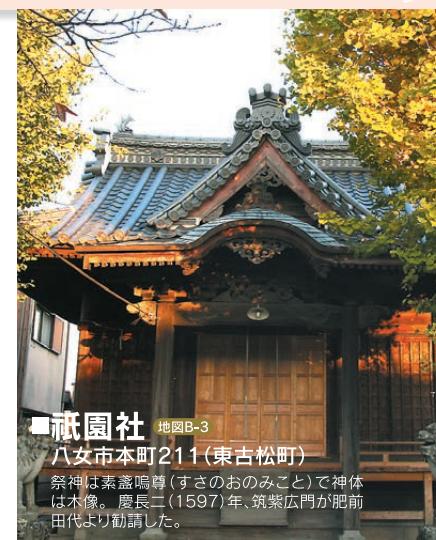
#### 松延貫嵐が学んだ八女の俳祖

「福島燈籠人形」中興の祖といわれる松延貫嵐こと松延甚左衛門に、書と俳句の手ほどきをしたのが若林旦夕だ。

市内清水町うらの旧墓地にあった母の墓碑に寄せた宗元名の碑文によると、母を思う孝心の厚い人物だったことがうかがわれ、門人が多かつたことも読み取れた。晩年は久留米に移住。

#### 若林 旦夕 (わかばやし たんせき)

天和元年～宝曆九年(1681～1759)  
福島町出身俳人。書家。名は宗元。珠品と称し、猿樂堂の別号。  
元禄15年(1702)、筑後を訪れた志太野坡の門に入り俳諧を学ぶ。



#### 祇園社 地図B-3

八女市本町211(東古松町)

祭神は素盞鳴尊(すさのおのみこと)で神体は木像。慶長二(1597)年、筑紫広門が肥前田代より勧請した。

麦の穂に鳥賊の雫や  
いちもど  
野坡

#### 志太 野坡

(じだ やば)  
寛文二年～元文五年  
(1662～1740)  
俳人

越前福井出身。松尾芭蕉の高弟で「蕉門十哲」の一人。元禄七年(1694)「炭俵」を編集・刊行。九州を数度訪れ多くの弟子を得た。

# 雅号「一心」の文字 坂本繁二郎

坂本 繁二郎  
(さかもと はんじろう)  
明治15年～昭和44年  
(1882～1969)  
福岡県久留米市出身  
洋画家 文化勲章受章  
フランスからの帰国後、  
昭和6年(1931)「八女には青い草がある。  
餓えることはない。」と  
八女定住を決意。「放  
牧三馬」などの代表作  
を八女で描いた。

## 画筆と朱鳥と石灯籠

無量寿院靈光殿にある筆塚は、坂本家から寄贈された坂本繁二郎愛用の筆5本が収められており、碑は幅約1m高さ1mの自然石。表面には坂本が自ら竹根に彫った雅号「一心」の陰影を拡大模刻し金で彩色されている。筆塚の副碑として、坂本が自宅の庭に置いて気に入っていた高さ1.5mの石灯籠、野見山朱鳥の句碑。同寺院には坂本の墓もある。

胸を衝く繁二郎の死。火の俳人、慟哭す。

## 坂本繁二郎筆塚、野見山朱鳥句碑

(平成13年(2001)建立 無量寿院)



愁絶の眼をみひらける大暑かな  
朱鳥

野見山 朱鳥  
(のみやま あすか)  
大正6年～昭和45年  
(1917～1970)  
福岡県直方市生まれ  
俳人 本名・正男  
妻は俳人・野見山ひふみ。  
俳諺「菜殻火」、  
句集「曼珠沙華」等。



地図B-2

## 無量寿院(むりょうじゅいん)

八女市本町283-1(西古松町)

天平期に創立され慶長六年に現在の地に移転した淨土宗寺院。本堂は】世紀末期の建築物。境内には天然記念物のケヤキ(樹齢推定400年以上)、藤の古木があり、櫻の時期には花見客も多い。敷地内には山本健吉・石橋秀野夫婦の墓もある。

うしろ姿のしぐれてゆくか  
山頭火

種田 山頭火  
(たねだ さんとうか)

明治15年～昭和15年  
(1882～1940)

山口県防府市生まれ。  
俳人 名は正一。  
季語や俳句の約束事にこだわらない自由律俳句の俳人。山口の大太主の家に生まれ、波乱の前半生の後、出家して各地へ行乞をしながら句作を続けた。松山にて没す。



見る者の「志」を  
映し出す鏡

文学碑は二つで、左に主文、右に代表作四作品の表紙。表面が凹状の御影石の前に立つと、自分の姿が鏡のように映し出される仕掛け。見る者は小島直記の問う「志」を自分自身と重ね合わせてみたい。

放浪の俳人、昭和の芭蕉

## 種田山頭火句碑 (平成12年(2000)建立 八女公園)

自由律の俳人、八女にて詠嘆しつつ…

種田山頭火を代表する有名なこの句は、八女の地で50才の時に詠まれた。「行乞(ぎょうこう)記」によると、昭和6年12月24日の朝、山頭火は山鹿温泉をあとにして、八女に宿泊。翌25日の天候は雨で時々霧(みぞれ)。「…山鹿の宿もこの宿も悪くない。二十銭か三十銭でこれだけ待遇されることはもったいないような気がする。…みんなとりどりに人間味たっぷりだ。」自嘲まじりの寂しい句だが、実際に宿泊した福島町の中屋で一夜は心温まるものだったことが窺える。

### ■八女公園 八女市本町569番地1(西京町)

福島城(天正年間から慶長年間にかけて築城)の跡地を利用した公園。公園内には、当時のイメージした噴水や掘割等がある。

志高く。肺腑を貫くような気迫を込めて

## 小島直記文学碑 (平成17年(2005)建立 八女公園)

### 「志」を説く八女生まれの伝記作家

八女市出身の伝記作家・小島直記は八女との関わりも深く、「坂本繁二郎伝」を執筆・八女市に寄贈し、横町町家交流館のふるさと文庫創設に尽力した。平成16年に八女市特別表彰を受賞。文学碑は彼の特別な思いを込めた直筆メッセージとして作られた。碑文は生涯の愛読書「言志後録」より引用している。

「私は”今日死ぬ”という覚悟のもと、一期一会の気持ちの中で、伝記=昔の人の「志」を媒介として現代の若い人々の中の素晴らしい魂とヴァイブレートすることに命をかけたい。」(「人生時刻表」新潮45より)

志氣には老少有りて  
佐藤一斎の著「言志後録」より

直記

小島 直記(こじま なおき)

大正8年～平成20年(1919～2008) 八女市福島生まれ

経済人などの伝記作家として知られる。「人間勘定」で第34回芥川賞候補に。私立八女津女子高等学校(現在の八女学院高校)や、母校の旧制八女中学(現在の八女高校)では社会科の教師だった。詩人の松永一は教え子。



### 八女で詠まれた句

以前はこの句が飯塚・大室府付近で詠まれたと言われてきたが、画家・杉山洋氏の調査により八女で詠まれたことが判明し、八女公園内に句碑が建立された。

地図C-2

### ■八女公園 八女市本町569番地1(西京町)

福島城(天正年間から慶長年間にかけて築城)の跡地を利用した公園。公園内には、当時のイメージした噴水や掘割等がある。

志高く。肺腑を貫くような気迫を込めて

## 小島直記文学碑 (平成17年(2005)建立 八女公園)

### 「志」を説く八女生まれの伝記作家

八女市出身の伝記作家・小島直記は八女との関わりも深く、「坂本繁二郎伝」を執筆・八女市に寄贈し、横町町家交流館のふるさと文庫創設に尽力した。平成16年に八女市特別表彰を受賞。文学碑は彼の特別な思いを込めた直筆メッセージとして作られた。碑文は生涯の愛読書「言志後録」より引用している。

「私は”今日死ぬ”という覚悟のもと、一期一会の気持ちの中で、伝記=昔の人の「志」を媒介として現代の若い人々の中の素晴らしい魂とヴァイブレートすることに命をかけたい。」(「人生時刻表」新潮45より)

志氣には老少有りて  
佐藤一斎の著「言志後録」より

直記

小島 直記(こじま なおき)

大正8年～平成20年(1919～2008) 八女市福島生まれ

経済人などの伝記作家として知られる。「人間勘定」で第34回芥川賞候補に。私立八女津女子高等学校(現在の八女学院高校)や、母校の旧制八女中学(現在の八女高校)では社会科の教師だった。詩人の松永一は教え子。





**鷗外「舞姫」論争で一世を風靡  
忍月句碑 (平成13年(2001)建立 花宗川沿い)**

**花掃けば花より抜けて蝶飛べり**

花掃けば  
花より抜けて  
蝶飛べり

石橋 忍月  
(いしばし にんづつ)  
慶応元年～大正15年  
(1865～1926)  
文芸評論家 本名・友吉  
黒木町生まれ  
山本健吉は三男  
帝大学生時代、森鷗外  
との「舞姫論争」は有名。  
山本健吉・石橋秀野夫婦らと共に市内  
無量寿院に眠る。



■酒井田氏一族館跡地  
氏神長田丸宮天満宮  
八女市酒井田776番地

第十四代  
**酒井田 柿右衛門 書**  
(さかいだ)  
昭和9年(1934)～  
有田の陶芸家、人間国宝



鷗外「舞姫」論争で一世を風靡

**忍月句碑 (平成13年(2001)建立 花宗川沿い)**

花宗川沿いは親愛なる養父の地

句碑は忍月の養父・養元の診療所兼邸宅のあった場所に建つ。忍月はたびたび八女を訪れており、三男・山本健吉も邸前の花宗川で水泳などを楽しんだという。

**画道一筋 決意かたく  
坂本繁二郎歌碑**

(平成16年(2004)建立 アトリエ跡地)

**「放牧三馬」が生まれた八女のアトリエ**

歌碑は「放牧三馬」等が描かれた市内緒玉のアトリエ跡地に建つ。裏面の「坂本繁二郎」の署名は自筆。戦後の苦しい時期の決意。

坂本の日記を写し取った  
薰夫人の筆跡を拡大  
模刻した。

**坂本 繁二郎**  
(さかもと はんじろう)

明治15年～昭和44年  
(1882～1969)

久留米市生まれ。雅号 帰居  
画家・青木繁は同郷・同級生。  
昭和6年(1931)、八女にアトリエを構え製作拠点とする。  
墓所は市内無量寿院。

■坂本繁二郎アトリエ跡地  
八女市緒玉134番地-1



此姿まさに歩む一筋  
この風となり雨となるともわれはたゞ

**「赤絵」創造の陶工・柿右衛門の故郷  
酒井田氏発祥の地 記念碑 (平成14年(2002)建立)**

**「赤」の根源には八女の風土が**

もともと市内酒井田は酒井田一族の発祥の地であり、初代柿右衛門(喜三右衛門)の父・円西は同地で生まれ育った。記念碑そばに、建立時に酒井田家より寄贈された柿の木が植えられている。



第十四代  
**酒井田 柿右衛門 書**  
(さかいだ)  
昭和9年(1934)～  
有田の陶芸家、人間国宝

わがくにはつくしのくにやしらひわけ  
はいますくにはせよほきくに

蕉門十哲の一人、岩戸山に立ち寄る  
**去来句碑 野田成亮日記碑**

(昭和55年(1980)建立 岩戸山古墳)

**石人石馬 もののふの夢の跡**

昭和9年に発見された野田成亮の「日本九峯修行日記」によって、去來が岩戸山を訪問して詠んだ句と、本人が触発され作った句が明らかになり、二人の顕彰句碑が建立された。この古墳一帯は「人形原」と呼ばれ、膨大な円筒埴輪や石人石馬が立ち並んでいた。



**野田 成亮**

(のだ なりしけ)

宝曆6年～天保6年(1756～1835)  
佐土原・安富寺住職、高位修驗僧  
回国修行旅行中、久留米藩で去來の句を知り、文化10年(1813)9月15日岩戸山を訪問して自分も句を詠んだ。

母を想う「浪漫の旗手」。夭折の天才画家

**青木繁歌碑**

(平成14年(2002)建立 岡山公園)

**山頂に立って歌う「望郷の歌」**

歌碑のある岡山公園は、繁が少年時代「画壇のアレキサンダー大王になる」と誓った場所。歌は当時日本一の櫻生産地だった室岡にいた母に捧げたもの。碑文の書は坂本繁二郎。すぐ近くの高速道路法面には、地元有志により櫻1000本が植栽され、毎年秋の「紅櫻まつり」では繁の子・福田蘭童作曲による父の歌を地元岡山小学校生が合唱している。



**青木 繁**

(あおき しげる)

明治15年～44年  
(1882～1911)

久留米市出身 洋画家  
繁の母のマサヨは八女郡岡山村(現八女市)室岡出身。29歳で死去した彼の葬儀は室岡の母の実家で行われた。



稻妻や人形が原の魂よばい  
去來



**向井 去來**

(むかい きよらい)

慶安4年～宝永元年  
(1651～1704)

俳諧師 長崎県生まれ。京都嵯峨野に住み蕉風の代表句集「猿蓑」を編纂。元禄12年頃岩戸山古墳を訪れた時に句を詠んだ。

**岩戸山古墳(国指定史跡)**

八女市吉田1552

九州最大級の前方後円墳で6世紀後半に北部九州を統治し朝廷と戦った筑紫君磐井(つくいのきみいわい)の墓。岩戸山歴史資料館では、そこから出土した埴輪など貴重な文化遺産を保存し展示公開している。

